

釈論大江千里集 (八)

小池 博明
半沢 幹一

【前説】

本稿は、「釈論大江千里集 (一) (二) (四) (六) (一) (『長野工業高等専門学校紀要』五一
号、二〇一七年六月、同五五号、二〇一八年六月、同五三三号、二〇一九年六月、同五四号、二〇
二〇年六月。いずれも電子版のみ) および「同 (三) (五) (七) (『共立女子大学文学部
紀要』第六五集、二〇一九年三月、同第六六集、二〇二〇年三月、同第六七集、二〇二一年三
月) の続稿であり、二九番歌と三〇番歌の二首を取り上げる。
本釈論全体の目的と意義の詳細、凡例や参考文献などについては、「釈論大江千里集 (一)」
を参照されたい。

枝空華落稀 (枝空しく華落つること稀なり)

二九 ふく風にえだもむなしくなりゆけばおつるはなこそまれにみえけれ

【通釈】

吹く風に (花が散って) 枝も空しくなつてゆくので、散る花もまれになつて見えるのだなあ。

【語釈】

ふく風に 万葉集には見られない句で、古今集には「吹く風にあつらへつくる物ならばこのひと
もとほよきよといはまし」(古今集・二・春下・九九)、「吉野河岸の山吹ふくかぜにその影
さへうつるひにけり」(古今集・二・春下・一二四・紀貫之) など、四例ある。五音なので、初
句・第三句に置かれることが多い。特に、後撰集・拾遺集では、「吹く風にちらずもあらなんむ
めの花わが狩衣ひとよやどきむ」(後撰集・二・春上・二五)「吹く風にあらそひかねてあしひ
きの山の桜はほころびにけり」(拾遺集・一・春・三九) など、全七例がすべて該歌と同様に初
句にあり、いずれも花との関係において用いられている。

えだもむなしく 「むなし」は、そこにあるべき中身や実体がない状態をいう。ここでは、咲いて
いる花が枝に花が無いに近い状態をいう。全釈ですでに指摘されているように、古今集前後に

「枝」が「むなし」という用例はなく、「芳野山花の古郷あとたえてむなしきえだに春風ぞふ
く」(新古今集・二・春下・一四七・藤原良経)、「秋かぜにあへずちりにしならしはのむなし
きえだにしぐれすぐなり」(秋篠月清集・九三〇)「梅がかをながめし袖にとどめおきてむなし
き枝に風ぞのこれる」(後鳥羽院御集・二五三)など、新古今集時代になつてから見られるよ
うになる。ただし、これらの例は「むなしきえだ」のように連体修飾関係にあり、諸注は、それ
を漢語「空枝」の和訓とする。それに対して、該歌は句題のそれに即す形で、主述関係になつて
いる。なお、本集で「えだ」を詠み込んだ歌には、四番歌の「花のえだ」、五一番歌の「もみち

「はのえた」がある。「えだも」の「も」という係助詞は、一首の表現から考えれば、「えだ」と「おつるはな」の並列であるが、「こそ」によって「おつるはな」のほうを取り立てていることになる。

なりゆけば 「なりゆく」は、次第にある状態になっていく、だんだんかわつてゆく_レの意。接続助詞「ば」は、上句を原因、下句をその結果として接続する。この句は、万葉集には見えず、三代集に、「……山あらしも 寒く日ごと_レに なりゆけば……」（古今集・十九・雑体・一〇〇五・凡河内躬恒）、「別れゆく道のくもゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ」（後撰集・十九・離別羈旅・一三三四）「あたらしきはさへちかくなりゆけばふりのみまさる年の雪かな」（拾遺集・四・冬・二五五・大中臣能宣）などのように、各一例見えるほかに、古今六帖・順集・惠慶集・能宣集・公任集にそれぞれ一例がある程度だが、本集には、該歌も入れて三例（三四・六一）見え、千里が好んだ表現らしい。

おつるはなこそ つとに小島憲之『学事近報』（『上代の文学——日本文学史1——』有斐閣選書一九七六年）が指摘しているように、花が散ることを、漢詩では、「花散」ではなく、「花落」とする。和歌では、「花」は「散る」のであり、該歌のように「落つ」とするものは、平安時代までを調査してもほとんど見られない。ただし、万葉集には、「今のごと心を常に思へらばまつ咲く花の地に落ちめやも（先咲花乃地尔将落八方）」（万葉集・八・一六五三・具大養娘子）がある。これは、「去年咲きし久木今咲く（久木今開いたつらに地にか落ちむ（土哉将墮）見る人なし）」（万葉集・十・一八六三）、「我が門の片山樞（可多夜麻都婆伎）まこと汝我が手触れなな地に落ちもかも（都知尔於知母加毛）」（万葉集・二十・四四一八・物部広足）ともあるように、「地に落つ」という比喩的な成句で、むなしくなることを含意する、特異な用法である。また、平安時代に見える用例のほとんどは、「東宮雅院にてさくららの花のみかは水にちりてながれるを見てよめる／すがのの高世枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ」（古今・二・春下・八一・菅野高世）、「きくのはなおちてながるみづにさへなみのしりなきやどにぎりける」（古今六帖・二・田舎・やど・一三〇九・紀貫之）、「なれにけん昔を忍ぶ袖の上におつる花も露けかるらん」（頼政集・六三三）のように、散り落ちる場所が決まっている場合や、「ふえのねにおつるをみればむめのはなはるのしらべとおもふなるべし」（高遠

集・六二）のように、掛詞（花が落ちる／調律が落ちる）のようになる場合、「風ふくとえだをはなれておつまじくはなとちつけよあをまぎのいと」（山家集・一五二）のように、言葉の対応による限定（挙例では「落つ」に対して「綴じつく」）など、花を「落つ」とする用例のほとんどは、特殊な要素が加わっている。該歌に、そうした要素は、句題との関係以外には、とくに見当たらない。本集では、散る花を十一・二六・二九番歌が詠むが、「落つ」とするものは、該歌だけである。十一番歌は、「落尽閑華不見人」という句題であるにもかかわらず、和歌は「ちりはつるまで」とする。

まれにみえけれ 「まれに」が「見ゆ」にかかる用例は、古今集に「けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見ゆ」（古今集・六・冬・三三三）があるが、たいへん少ない。花がまれに見えるのと用例は、鎌倉時代まで見ても「よもぎのみしげれる庭となるやどは葦さへこそまれにみえけれ」（俊成祇園百首・葦菜・一六）、「さきやらぬ末葉の花はまれにみえて夕露しげき庭の萩原」（玉葉集・四・秋上・章齋院・四九三）が検索される程度で、三代集時代に当該歌以外に用例は見当たらない。当集の「まれ（ら）」は三五・二六・二九番歌にあり、すべて夏部に見える。また、一番歌の「まれらなり」を含め、落花（二六・二九）と鶯の声（一・二五）の状態の表現に限定される特徴がある。これは、一五・二六・二九番歌の句題それぞれに「稀」があることから、それを和歌にそのまま用いたのだろう。「けれ」は第四句末「こそ」の結び。

【補注】

一首の組み立ては、「……ば（接続助詞）……けり」という古今的な類型である。本集はこの類型を好み、全体の割余り、一三例（三二・二九・三九・六一・六五・七〇・七九・八九・九四・九五・一〇〇・一一〇・一一三）もあり、古今集よりも高い割合である。しかも、ほぼすべてが該歌同様、「……ば」が上句、「……けり」が下句である。例外の一〇番歌も、「わが身をばうかべるくもになさればそゆくかたもなぐはかなかりける」と、第三句末の係助詞「ぞ」は、「ば」に下接するのであり、この類型に準じる。

「……ば……けり」の「ば」は、気付きを表わす「けり」の性格から、「みわたせば柳桜をこきませて宮こそ春の錦なりける」（古今集・一・春上・五六・素性）、「花られる水のまにまにとめくれれば山には春もなくなりけり」（古今集・二・春下・二二九・清原深養父）のように、

原因・理由ではなく、偶然条件となることがほとんどである。たまたまという条件の下で、意外な事柄の実現に気付いたということで、この場合、「けり」の認識が統括するのは、後件のみとすべきであろう。

しかし、該歌における、枝に花が少なくなっていくことと、落花が稀に見えることは、偶然の結果ではなく、因果関係としか捉えようがない。枝の花が少なくなれば散る花も稀になるのは、その限りでは当然だからである。例外的に同じく因果関係にある「ときはなる松のみどりも春くれは今ひとしほの色まさりけり」（古今集・二・春下・二四・源宗子）、「郭公人まつ山になくなれば我うちつけにこひまさりけり」（古今集・三・夏・一六二・紀貫之）などは違つて、こゝから後件の事態に気付くまでもない。本集の配列から見れば、「ちりまがふ花はこのはにかくされてまれににはへる色ぞともなき」（二二六）の、盛んに散る花の段階を経過して、気が付けばもはや落花すら稀になっていたということであり、希少な落花そのものを詠んだところが、該歌の特色と言へば言えよう。

とはいえ、その気付きが夏歌としてどのような情感あるいは情趣を伴うものかとなると、疑問とせざるをえない。本集夏歌の冒頭歌「このめはるはるさかえこしえたなればはなのかけとぞなりまさりける」（二二二）に関して、本釈論では、「なつのかけ」ではなく「はなのかけ」という本文を尊重して、これを春盛りの幻視とみなしたが、夏歌の半ばに至つてもなお散る花に惜春の情をおぼえる歌を載せるとは、考えにくいのではあるまいか。

原因に相当する上句が、風に吹かれて散り、枝に咲く花が乏しくなりつつあるという事態を表すという解釈は動かしがたい。そして、その推移する事態は、第三句の「なりゆけば」により、すでに終わったことではなく、現在から今後も続くことを意味する。これに対する下句において留意すべきは、落花が稀に見えるというのは逆に考えれば、枝に残つた花の大半は落花していないということである。もともと残りの花の数は少ないとしても、「はなおつること」ではなく「おつるはな」という表現は、「はな」そのものに焦点を置いていることを示している。

つまり、下句のポイントは、花が散ることのほうではなく、花がなお枝に咲き続けていることのほうだということである。歌末の「けり」が表すのは、夏半ばになつてもなお、わずかではあれ、春花を見続けることができることに對する驚きではないだろうか。枝が空しくなつた分だけ、残り続ける花はかえつて目立つのであり、だから「その「なりゆけば」なのである。上句の

「むなし」と下句の「まれ」を同義反復的にとらえれば、因果関係でさえないことになるが、映っている花の目立ち具合という点では、両者は因果関係として成り立ちうる。

このような、もう惜春の情とは離れた季節越えの発見に重点を置くような詠みぶりは、ある意味で歌の掟破りと言えらる。以前にも指摘したように、そこに季節歌の定型性を打破せんとする千里の挑戦を見ることもできるかもしれない。

なお、赤人集に「ふくかぜにえだのむなしくなりゆけばおつるはなこそまれにみえけれ」（五四）と、第二句を「えだの」として載る。

【比較対照】

当歌句題の原拠詩は未詳なので、五言の句題そのものと比較するしかない。

表現上、「枝空」に対しては第二句の「えだもむなしく」、「華落稀」に対しては下句の「おつるはなこそまれにみえけれ」が語順どおりに対応している。その限りでは、当歌は句題をほぼそのまま邦訳したと見ることができよう。実質的に付加されたのは、初句の「ふく風に」のみであり、枝が空しくなつた理由付けをしていることになる。【語釈】に示したように、風は枝の花を散らし、枝を空しくするという結び付けは歌において常套的な方法である。

ただし、細かく見るならば、句題では「枝空」と「華落稀」が並列されているのに対して、当歌では第三句「なりゆけば」によつて、句題にはない、時間的な経過を示すとともに、前件が後件の原因・理由という関係付けにしていることになる。このような関係付けの仕方は、一首としての表現量を満たすことや全体のまとまりを付けることのために行われたことと考えられ、本集ではよく見られるケースである。

原拠詩における句題の位置ももとより不明であるが、それ自体としては状況を描写するだけであつて、表現だけからは季節も特定しえず、そもそも夏ではないという可能性もある。実際の当の句題内容は、夏の風景としてふさわしいとは言いがたい。それを、千里があえて夏歌の句題に据えたとするれば、新たな気付きを示すとともに、それだけでなくも歌材に乏しい夏歌に、ある程度の歌数を確保しようとしたからとも考えられる。該歌もまた、本集の夏部に配列されず、単独で見たらば、季節を問いくらう。あるいは、【語釈】の「まれにみえけれ」の項で指摘したように、「まれ(ら)」を夏歌の一つのキーワードにしようと目論んだと推定されなくもない。

鳥思残花枝（鳥思ふ、残花の枝）

三〇 なくとりのこゑふかくのみきこゆるはのこれるはなのしたをわぶるか

【通釈】

鳴く鳥の声が心に深く聞こえるばかりなのは、残花の下をつらく思うからなのだろうか。

【語釈】

なくとりの 「なくとりの」という句は、万葉集に集中して十首ほどあり、そのうち該歌のよう

に「声」にかかる用例が六例ある。短歌では、「佐保渡り我家の上に鳴く鳥の声（鳴鳥之音）な

つかしき愛しき妻の児」（万葉集・四・六六三・安都宿祢年足）、「恋衣着奈良の山に鳴く鳥の

（鳴鳥之音）間なく時なし我が恋ふらくは」（万葉集・十二・三〇八八）のように、第三句に「な

くとりの」があり、第二句は句末に格助詞「に」を置き、鳥が鳴く場所を示すという、構文上の

類型が見られる。それに対して、該歌では、初句に「なくとりの」が置かれ、それが第二句冒頭

の「声」に係っている。また、本集二七番歌にも見られ、「ね（音）」を修飾するが、第四句に

位置していて、どちらとも万葉集とは異なる。

「おふかくのみ」「おふかく」は鳴く鳥の声そのものではなく、その聞こえ方のありよう、言い換え

れば、聞く主体の心情のありようを示している（二七番歌【語釈】「いたくきこゆる」の項を参

照。「声」が「おふかくきこゆる」という用例は稀であるが、すでに全訳が指摘するように、「う

りふやまもみぢのなかに鳴く鹿の声はふかくもきこゆるかな」（元稹集・一六六）がある。副

助詞「のみ」については、一五番歌【語釈】「あかでのみ」でも触れたが、上接語の「おふかく」

を取り立てるのではなく、句全体つまり「なくとりのこゑふかくきこゆる」という事態に対する

まり、「こゑふかくきこゆる」という事態が、これまでも何度も繰り返されてきたということである。

きこゆるは 初・第二句を受け、「なくこゑのふかくきこゆる」全体が、当句末の提題の係助詞

「は」により、一首の主題となり、下句がそれに対する説明に相当する。【補注】参照。

のこれるはなの 「のこれるはな」は、「……しづえにのこれるはなはしましくはちりなま

がひそ……」（万葉集・九・一七四七）と万葉集から見られるが、用例数は少ない。「のこれる

はな」は、二六番歌の「ちりまがふ花」、二九番歌の稀な落花を経た段階であり、枝にわずかに

残る状態の花である。

したをわぶるか 「した（下）」を「えだ（枝）」とする本文が多いが、校訂は必要最少限にする

という、当訳論の方針から底本のままとしておく。「はなのした」と「はなのえだ」とでは、当

然ながら、何のどんな状態を「わぶる」かが異なる。「わぶ」は、思い通りにいかずに気落ちす

る、辛く思うの意。本集では他に、「わびてふるやどにもかりのくれゆけばふかくかぜのみぞとき

しなりける」（七〇〇）の一例がある。「わぶ」と同源の「わびし」という形容詞を用いた、該句

に類似する例としては、「花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ」（古今

集・二・春上・一〇八・藤原千蔭）や「うぐひすのすみかのはなやちりぬらむわびしきこゑに

（佐敷音丹）うちはへてなく」（新撰万葉集・三九）がある。これらは、花が散ることを、鶯が

「わびし」と思い鳴いていることを示している。これらに対して、該歌は、「のこれるはなのし

た」を「わぶ」のであるから、少なくとも表現上は、花が散ることに對してではないという点で

異なる。また、該歌では、「わぶ」の主体が鳥であることも明示していない。この点について

は、【補注】参照。句末かつ歌末に位置する終助詞「か」は、本集に他に例がない。

【補注】 該歌にも認められる「……は……か」という構文は、万葉集と八代集の範囲で調査すると、

「ひさかたの雨には着ぬを怪しくも我が衣手は（吾袖者）干す時なきか（干時無香）」（万葉

合もある。万葉集歌は、衣の袖が乾かないのは事実である一方、後撰集歌の噂が本当かどうか、拾遺集歌の沖に燃える火が漁り火であるかどうかは、詠歌成立の時点では不明であることが、「か」の解釈の違いとなる。検索の範囲全体としては、後者が圧倒的に多い。

該歌は、上句で提示された事態について、下句がその成立する理由を疑いの気持ちで述べるといふ構成である。すなわち、鳥の声が心に深く聞こえる事態を主題とし、それがこれまでとは違うことの原因を疑問とともに述べるわけであるが、【語釈】でも触れたように、その理由の内容や示し方において、類例とは二つの点で大きく異なる。一つは、「わぶ」対象は散る花あるいは花が散ることであるとはしていない点、もう一つは、「わぶ」主体が鳥であるとはしていない点である。

第一点に関しては、「のこれるはなのした」をいかに解釈するかである。「わぶ」のが枝にわずかに残る花に対してではなく、その下にあるものならば、残花と対比的に想定されるのは、圧倒的な数の、すでに地に散り落ちた花であろう。直前の二九番歌が枝に残った、わずかな花に注目したのとは、「散る」というプロセスをはさんで、その前とその後を詠んだという点で、続けて配列された両歌は、見事に対照的である。

第二点に関しては、「ふかくきこゆ」が聞く主体の心情のありようを表しているとするならば、それがまさに「わぶ」という心情と結び付くのであって、鳥の鳴き声が変化したことではあるまい。むしろ鳴き声は以前と変わらないにもかかわらず、その受け止め方がこのごろ変わったことに疑問を抱いたのである。そのきつかけとなったのが、枝に咲く花から地に散り敷いた花に目を転じたことである。おびたしい数の、その無惨とも言える花のありようを「わぶ」という心情で受け止めることは、ごく自然なことであろう。それを取り上げ詠むことが、当時の歌の常識からはひどくかけ離れていたとしても。

配列という観点から見ると、該歌は、夏部に別々に詠まれてきた鳥（鶯）（三三・二五・二七）と、花（二二・二六・二九）ただし、二八番歌の開花する運は除く）とが、一首にまとめて詠まれるとともに、以後、夏部に鳥も花も詠まれないということから、夏部の配列上の区切りの一つとして位置付けることもできる。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の五言排律「首夏同諸校正遊開元觀、因宿翫月」（卷第五・〇一七八）であり、句題はその第二二句から採られたものである。

我与二三子 策名在京師 我、二三子と、策名して京師に在り。
官小無職事 閑於為客時 官小にして職事無く、客と為る時よりも閑なり。
沉沉道觀中 心賞期在茲 沉沉たる道觀の中、心賞、期すること茲に在り。
到門車馬廻 入院巾杖隨 門に到り車馬廻り、院に入りて巾杖隨ふ。
清和四月初 樹木正華滋 清和、四月の初め、樹木、正に華滋す。

風清新葉影 鳥恋殘花枝 風は清し、新葉の影。鳥は恋ふ、殘花の枝。

向夕天又晴 東南余霞披 夕に向んとして天又晴れ、東南、余霞披く。

置酒西廊下 待月盃行遲 酒を西廊の下に置き、月を待ちて盃行ること遅し。

須臾金魄生 若与吾徒期 須臾にして金魄生じ、吾が徒と期するがことし。

光華一照耀 樓殿相參差 光華、一たび照耀して、樓殿、相參差たり。

終夜清景前 笑歌不知疲 終夜、清景の前、笑歌して疲れを知らず。

長安名利地 此興幾人知 長安、名利の地、此の興、幾人か知る。

卷五には閑適の詩が集められており、この詩も永貞元（八〇五）年四月に、白氏が校書郎の同僚と、暇に任せて道教の寺である開元觀に泊して、月見をした折のものである。いかにも閑適詩らしく、詩全体がのびやかな初夏の風趣に包まれていると言える。句題に採られたと見られる「鳥恋殘花枝」も、新釈漢文大系（岡村繁『白氏文集 一上』明治書院、二〇〇七年）が「鳥は枝に残る花を慕って轉っている」と通釈するように、対となる「風清新葉影」とともに、初夏らしい情景の一つを描写するのみであって、それに興趣を覚えこそすれ、マイナスの感情はまったく認められない。

なお、本集の句題は「鳥思残花枝」であり、第三字が原拠詩の「恋」と異なる。本集諸本においても両字の異同が見られるが、意味に大差があるわけではない。全釈によれば、『白居易集箋校』では、宋本・何校本に「鳥思」とあり、「千里が見た文集は「鳥思」で可能性はある」とする。

句題と歌との表現上の対応関係を見てみると、「鳥」と「とり」、「残花」と「のこれるはな」がそのまま対応するのみであり、句題が短い五言句ということもあって、歌一首と成すために、付加されたのが自立語レベルで、順に「なく」「こゑ」「ふかく」「きこゆ」「した」「わぶ」のように、はるかに多い。

句題で残された「思」には、内面的行為としては「わぶ」が一見対応しそうであるが、【補注】のような解釈をしたら、内実はまったく異なる。句題の「思」が鳥の鳴き声から想像されたとすれば、対応するのはむしろ「なく」であり、「鳥」「とり」との位置関係としても、そのほうが無理がない。また、「枝」については、本集における本文異同の問題があり、底本の「した」ならば、対応させたい。

該歌においては、句題を含む原拠詩の閑適詩としての趣はまったく見出しがたい。あえて言えば、該歌も、花や鳥を観察あるいは鑑賞し続ける時間的な余裕が背景にあつてこそ成り立つものではあるが。ただ一つ、本集夏部における該歌の位置の妥当性はともかく、原拠詩が『首夏』であるのは明らかであるから、それによつて、該歌も夏歌であることが担保されている。句題であれ、該歌であれ、表現自体のみからは季節は特定しえない。

原拠詩における自然描写としての句題が歌において心情表現の一部と化すことについては、本集の通例パターンとも言えるが、該歌の場合、そのパターンをふまえたつとも、他歌とは大きく異なる点がある。それは表現上の焦点を、鳥から人つまり詠み手に切り替えた点である。同パターンの他歌においては、歌材と詠み手のありようを、さまざまに重ね合わせる方法を探っているのに対して、該歌は巧みにそのように見せかけながらも、すでに述べたように、じつはあくまでも詠み手自身中心に切り替えているのである。

その点からは、歌末の「か」の示す疑問も、疑問であるがゆえに、それが鳥に向けられているように受け取られがちであるが、「ふかくのみきこゆる」ことの理由が、一般的に挙げられる鳥

の鳴き声のありようではなく、自身の気持のありように他ならないことを、いわばアンチ・テーゼのように表わすものではなかったかと考えられる。

この時、該歌は、句題さらに原拠詩から遠く隔たった境地を自指したことになる。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’
(大江千里集) (8)

KOIKE Hiroaki^{*1} and HANZAWA Kan'ichi^{*2}

This paper is an investigation and interpretation (稜論) of ‘*Oe no Chisato-shu*’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌 = ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩 = ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first, this paper treats of Waka No.29~No.30 of ‘*Oe no Chisato-shu*’.

キーワード：大江千里，句題，白氏文集，表

^{*1} 一般科教授。本研究には、小池について交付された J S P S 科研費 16K02390 (基盤研究 C) による研究成果が反映されている。

^{*2} 共立女子大学文芸学部教授